

建築の空間構成計画学

中井 邦夫*

Compositional Planning Theory of Architecture

Kunio NAKAI*

1. はじめに

日本は戦後から続いた大量生産消費型社会を経て、資源循環型の社会へと価値観が大きく変化しつつある。そうしたなかで建築や都市のあり方についても、高度成長期におけるスクラップ・アンド・ビルド的な開発から、安定成長期における既存ストックの活用再生へと関心が移り変わり、そうした社会状況において建築学が果たす役割も変化しつつある。そのような社会的、学問的な背景において、私が研究の大きなテーマとして考えているのは、いわば建築の「空間構成計画学」もいべきものである。ここでは、その構想について総論的に述べてみたい。

2. 研究の背景

一般に建築学には、構造や環境設備、デザインなどの様々な学問領域が含まれる。そのなかで、かつて高度成長期において緊急かつ大量に必要とされた様々な施設の建設を理論的、実践的に支えるものとして、建築計画学と呼ばれる分野が大きく発展した。計画学は、建物の用途や使われ方に基づいて、居住施設や学校、文化施設、商業建築、工場、オフィスなどといった建築種別＝いわゆるビルディング・タイプを定義しモデル化することで、それらの効率的な設計や建設を可能とし、時代の要請に応えた。しかし、近年の建築用途の多様化や、異種用途への転用などにおいては、これまでの用途の括りにおさまらない新たなプログラムや、用途が決まる以前に建物が先に存在しているというような現象が普通におきている。このような現代の社会状況において、従来の建築計

画の考え方だけでは、人々の多様化する生活空間を支えることができなくなっている。つまり、施設ごとにパッケージされた用途種別に基づいて、それらを「いかに計画するべきか」を考える従来のアプローチだけではなく、ある特定の場所や建物を前提とした場合に、そもそもそこに「何を計画するべきか」が問われているように思われる。それは、用途や使い方などを前提とせず、それらを空間のあり方と同時に発想することを要請する。こうした要請に応えるためには、計画の前提ともなる、建築実体や都市空間そのものが有する性質を、実体的かつ具体的に捉える視点が求められる(図1)。

ところで、建築の実体や都市空間そのものに関する研究は、建築史・建築意匠の分野においても盛んに行われてきた。それらの多くは、特定の時代や作家に関する形態論やその思想などを論じるものが中心であったが、この分野で蓄積された建築の具体的な形態や形式についての研究は、現代建築や都市を考察するうえでも活かすべき点が多い。また近年では、いわゆる建築計画学の研究主体と実践的な設計主体との分化が進んでいるが、元来建築計画学は、実践的な設計の理念として、設計実務と並行して構想された研究分野である。たとえば戦後の建築計画学の確立に大きな功績を残した故吉武泰水は、数多くの実作を残した建築家でもあった。つまり計画学の根幹には、彼のような個性が生み出す実践的な空間表現が含まれていたともいえるのである。「表現」というと何やら作家の恣意的なものと捉えられがちであるが、吉武らの試みは、科学的で客観的な観察を踏まえた建築設計の創造的なあり方を目指すものであり、いわば建築の表現に論理(と倫理)をもちこむことであつたともいえるのではないだろうか。上述したような現代の社会状況において、こうした姿勢は再度見直されるべきであるといえる。

*准教授 建築学科
Associate Professor, Dept. of Architecture

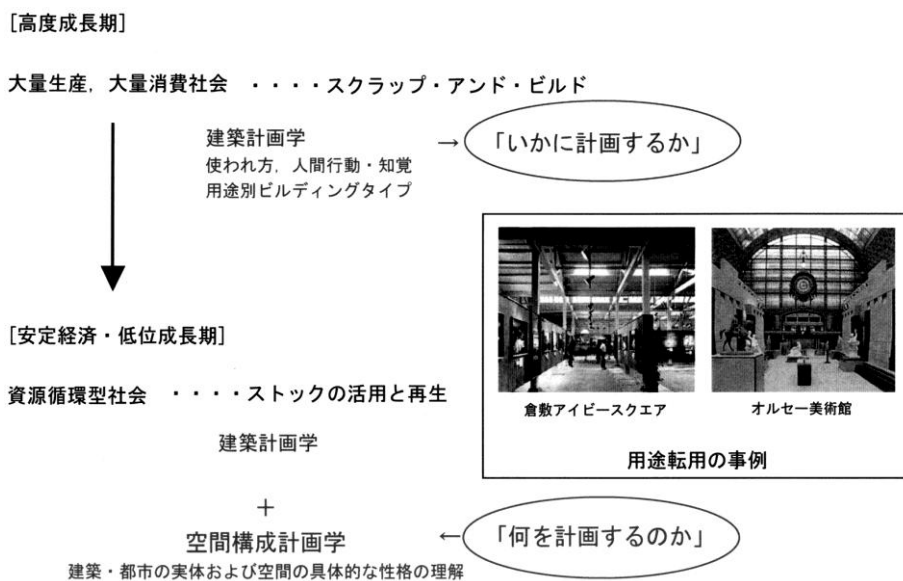


図1 空間構成計画学の背景

3. 建築の空間構成計画学

以上のような社会的、および学問的な背景において、私が考える「空間構成計画学」は、複雑化、多様化する現代の建築や都市を、構成的な形式から捉え直すことにより、新たな計画のあり方を提案するための研究分野となることを目指すものである。そのためには、第一に未だ認識されざる建築や都市の具体的な空間的、物的な構成を明らかにすることが重要であると考えます。

現代都市は、人も物も建物もかつてないほどに集積し高密度化している。そうしたなかで、建物の外形や構成は多様化し、また用途も複合化し、その立地する環境は様々

である。ところが研究者も建築家も、こうした現実をどのように理解すればよいのか、ほとんど手だてがないというのが実情ではないだろうか。そこで本研究では、様々な事物や空間どうしの関係が作り出す構成的な側面に焦点をあてることによって、現代の建築や都市のあり様を少しでも理解する手がかりとなる認識の枠組みを構築したい。そのことを通して、今後の計画や設計における認識的な基礎となる知見を得、さらには、その知見を踏まえた実践的な活動を行うことが可能となるであろう。こうした研究は、従来の計画学と歴史・意匠、および実践的な設計活動の中間に位置するような研究分野となるものと考えます(図2)。

具体的な研究の方法は、これまでのところ以下のように大きく3つの方針に基づくものと想定している。

1) 「定性的アプローチ」

これまでの計画学がどちらかというと定量化・指標化を目指すものであったのに対して、研究対象の空間や物的な構成の分析を通して、それら相互の定性的なあり方に注目し、相違点を明確にすること。

2) 「構成的タイポロジー」

定性的な分析に基づいて、空間や実体の構成によって定義されるタイプを見いだす。そうしたタイプを数多くの事例を通して見出していくことにより、空間や実体の構成がさまざまな計画水準との関係において果たす役割

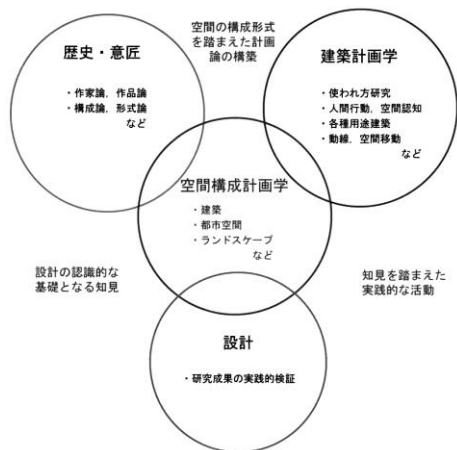


図2 他の研究領域との関係

を見直そうとするものである。

3) 「関係の構造化」

見出したタイプの性格の相違を検討し、それらに関係づけ形式的・体系的に構造化する枠組みを提示することにより、新しいタイプの発見や、それに基づく計画的な構想が可能となる。

以下では、筆者の論文を具体例にして、その具体的な研究内容について述べてみたい。

4. 外形の分節による建築の構成形式^{(1)~(6)}

筆者はこれまでに「現代建築における外形ヴォリュームの分節条件に関する研究」と題していくつかの論文を発表してきている。それは、多様化する現代建築作品の「外形」が、用途や立地環境などの諸条件との関係において、どのような形式性を帯びているのかについて論じたものである(図3)。

4-1. 研究の主旨

建築の外形は、周囲の環境と相まって町並みや風景を

つくりだし、人々が好むと好まざるとに関わらず、多くの人々が目にするものである。これは、実体として建ち現れざるを得ない建築の、いわば宿命的な側面であり、そのようなことから建築の外形は、周囲の環境や、あるいはより広く社会に対するメッセージを定着する媒体のような役割を果たしていると考えられる。

また一般に建築は内部空間を合わせ持っている。建築の外形がもつ固有の性質は、それが内部空間と外部空間の境界をなしており、外形が決定されると必然的かつ同時に内外空間の広がりや形状がほぼ定義されてしまうことである。通常の建築設計では、こうした一方的な関係ではなく、外形の内外双方における問題が同時に検討されつつ、数多くのフィードバックを経ると考えられるが、その結果、建築の外形にはそうした様々な条件の取捨選択やせめぎ合いの結果が表現されることとなる。

以上のようなことから、古今東西の建築家や研究者たちは、建築の外形をどのように決定するべきか、どのような問題の媒体とするべきかについて、様々な議論を続けてきた。その多くは、建築の外形を何らかのかたちで意味づけ、正当化しようとするものであった。古典主義的な建築においては、外形はオーダーやアーチなどで分節され、様式化されることで規範的な存在となり得たし、

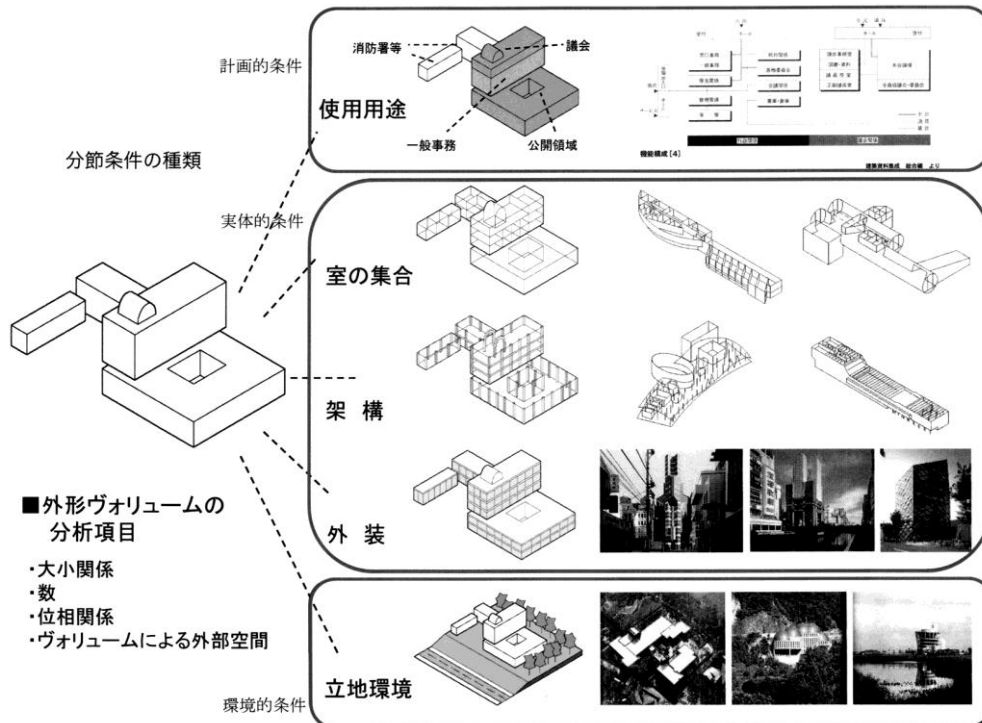


図3 建築の外形ヴォリュームの分節条件

その規範にしたがうことが正当性を表現した。また、近代的な建築運動においては、建築物の外形は内部の空間構成や構造を素直に表現するべきだとする考え方が起こり、外形は内部を表象する断面のようなものとして扱われた。さらには、こうした考え方を一切相対化するように、内部の構成とは無関係な奇抜な外形を、様々な素材を用いて表現するような、彫刻のような建物がみられることもあった。こうした考え方の多くは、各時代において思想上の教義のような響きをもって表明されることが多かったが、実際にはそれらの是非は問題ではなく、むしろ建築の外形が媒体として担い得る意味の多様性を示していると捉えるべきである。

では現代の建築では、それに関わる多種多様な条件との関係において、どのように外形が決定されているのだろうか。またそうした諸条件は、個別の建物や設計者の問題を越えて、より一般的な建築の問題として、どのようなかたちではたらき、外形にどのような形式性を与えているのであろうか。本研究では、多くの現代建築作品を資料として取り上げ、それらの外形と、外形に関わる使用用途、内部の室、架構、外装や外部空間、および立地環境などといった諸条件との関係性を具体的に検討することにより、こうした疑問に対する基礎的な回答と知見を得ることを試みた。

4-2. 建築の外形と用途の関係による定性的分析 - 戦後の市庁舎建築を通して

建築を計画するうえで基本的な問題のひとつに、多様な「使用用途」の取り扱いを挙げることができる。これまでの計画学においては「事務所建築」の一種とみなされることの多かった戦後の市庁舎建築は、実際には一般の事務スペースだけでなく、窓口やホールのような市民への公開部分や議会といった各種の用途が複合した複雑な部門構成をもつと同時に「市庁舎」としての一体性が要求されるという特徴的なビルディング・タイプである。つまりそこでは、人や物の数や密度、行動パターンなどから定義分類されてきた用途の集積である以上に、多様な用途からなる部分をいかにひとつの建築にまとめるかという、いわば建築の全体性を獲得するうえでの構成的な意味づけが重要と考えられる。そこで、とくに周囲へ向けた建物の全体性が表現されやすい外形構成が、使用用途の複合性とどのように関係しているのかについて定性的な検討を行った。

まず、本研究の関心に沿って各建物の外形構成を明確にするため、建物の全体形を単純な「外形ヴォリューム」の配列から捉え(表1上)、該当数の多いいくつかのパタ

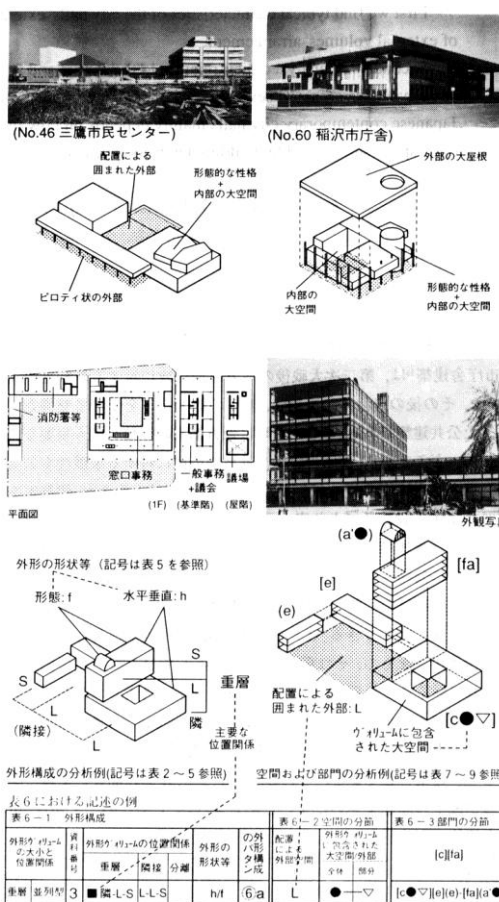


表1 戦後の市庁舎建築における外形と用途の関係
外形ヴォリュームの分析例(上)、部門の種類(下)

部門名	記号	部門の内容	公開領域
公開部分	P	「市民ホール」「展示ロビー」などと呼ばれる一般に公開された部分	公開領域
行政	C	一般市民が利用する手続き等の窓口業務	
	F	窓口業務以外の事務的業務	
議会	A	議場、委員会等議会関係の業務(なお議場のみが分節されている場合は「a」として別に表記)	
動線通路	S	階段、廊下、垂直動線等	
公共施設	I	公会堂、市民会館、図書館等	
現業施設その他	E	水道局、消防署等	

ンを得た(表2外形構成のパターン)。次にそうした外形ヴォリュームに対して、内部の使用用途=「部門」の違い(表1下)が、どのように対応するのか、内部の大空間や外部の広場といった、特徴的な空間の有無も合わせて検討し、部門の分節におけるいくつかのパターンを得た(表2部門の分節)。各資料を、縦軸を外形構成のパターン、横軸を部門の分節のパターンとするマトリックス(表2)上にプロットすることにより、それらの構成の相違点を相対的に捉えることができる。

表2 戦後の市庁舎建築における外形構成のパターンと内外の空間および部門の分節

表6-1 外形構成				表6-2 空間的分節		表6-3 部門の分節													
外形が「リウム」の大小と位置関係	外形が「リウム」の位置関係			外形の形状等	外形構成のパターン 右上の数字は該当資料数を示す	外形が「リウム」に包含された大空間/外部	基本的な部門の一体化		部門ごとの分節										
	重層	隣接	分離				[cfa]	[cf]a	行政-議会 [c]a	公署-議事 [c]a	一般事務-議事 [c]a	市庁舎-公共施設 [c]a	部門ごとの分節がみられない						
単体型	41			a*	① 全体性の強調	8	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a	[c]a							
	49			a*															
	85			a*															
	73			a*															
	20			c*															
	9																		
	25																		
	55																		
	23	L-S		a									②a 全体性の強調	9	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a
	39	L-S-S		a															
76	L-S		a																
35	L-S		a																
36	L-S		a																
42	L-S		a																
67	L-S		a																
90	L-S		a																
33	L-S		a																
84	L-S		a																
22	L-S		a	②b 全体性の強調	3	部分	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a									
45	L-S		a																
70	L-S	L-S	a								③ 全体性の強調	5	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a		
13	L-S	L-S	a																
52	L-S	L-S-S	a																
43	L-S	L-S	a																
78	L-S	L-S-S	a																
56	L-S	L-S	fh																
18	L-S	L-S	fh																
14	L-S	L-S	fh																
40	L-S	L-S	fh																
89	L-S	L-S	a*	④ 主要部の強調	7	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a									
57	L-S	L-S	a*																
2	L-S	L-S	a*																
80	S-S	L-S	f								⑤ 部分の個性性の強調	7	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a		
29	S-S	L-S	f																
12	S-S	L-S	f																
19	S-S	L-S	f																
31	S-S	L-S	f																
11	S-S	L-S	f																
37	S-S	L-S	f																
3	L-L-S	L-L-S	fh	⑥a 対比された部分の接合	6	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a									
8	L-L	L-L	fh																
86	L-L	L-L	fh																
15	L-L-S	L-L	fh																
16	L-L-S	L-L	fh																
21	L-L-S	L-L	fh																
56	L-S	L-S	a								⑥b 連結による部分の統合	5	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a		
10	L-S	L-S	a																
48	L-S	L-S	a																
54	L-S	L-S	a																
58	L-L	L-L-S	a																
75	L-S-L	L-S-L	a	⑦a 対比された部分の接合 連結による部分の統合	7	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a									
91	L-S-L	L-S-L	a																
62	L-S-L	L-S-L	a																
82	L-S-L	L-S-L	a																
92	L-S-L	L-S-L	a																
63	L-L-L	L-L-L	fh																
81	L-L-L	L-L-L	fh																
69	L-L-S	L-L-S	fh																
83	S-S	L-L-L	a																
38	L-S	L-L-L	a								⑦b 対比された部分の接合 連結による部分の統合	4	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a		
30	L-L	L-L	a																
64	L-L	L-L	a																
4	L-L	L-L	a																
79	L-L	L-L	a																
24	L-L	L-L	a																
1	L-L	L-L	a																
26	L-S	L-L	m																
46	L-L	L-L	fh																
93	L-S	L-L	fh																
72	L-S	L-L	fh	⑦c 対比された部分の接合 連結による部分の統合	13	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a									
28	L-L	L-L	a																
68	L-L	L-L	a																
27	L-L	L-L	a								⑧a 部分の個性性の強調	9	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a		
71	L-L	L-L	a																
44	L-L	L-L	a																
17	L-L	L-L	a																
65	L-L	L-L	a																
66	L-L	L-L	a																
34	L-L	L-L	a																
74	L-L	L-L	a																
59	L-L	L-L	a																
47	L-L	L-L	a	⑧b 連結による部分の統合	6	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a									
77	L-L	L-L	a																
32	L-L	L-L	a																
5	L-S	L-L	a																
87	L-L	L-L	a								⑨ 部分の個性性の強調	4	全体	[cfa]	[cf]a	[c]a	[c]a		
53	L-L	L-L	a																
51	L-L	L-L	a																

表6-1注・並列型等においては複数の位置関係がみられる場合には、全体の外形構成に主要と思われる位置関係に基づいて検討している。なお主要な位置関係については「■」を付し、他の位置関係を「重」、「隣」、「分」として表内に記す。

表6-2注・[○▼]の表記はひとつの外形が「リウム」に包含された大空間/外部を表す。主「p」に対して裏にある外部には「b」を付す。

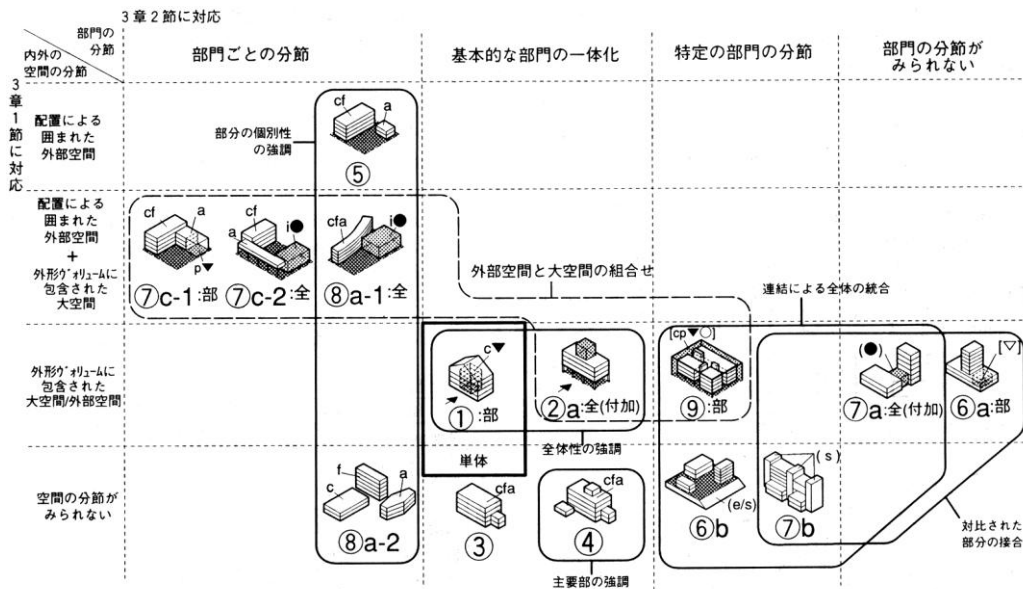
表6-3注・大小関係における付加的な「リウム」要素は「()」要素は「[]」で表す。それ以外の「リウム」は「[]」で表す。複数の位置関係をもつ場合における主要な位置関係は「-」で表す。大空間/外部に関わる部門について、例えば大空間を部分にもつ「リウム」要素に含まれる窓口事務の場合には「p▼」として表す。

■市庁舎建築の構成的タイプロジー

その結果、相対的に資料数が多く集中するいくつかのマス目がみられた。そこでこれらを類型として位置づけた。いわばこうした類型全体が本研究で資料とした市庁舎建築の「構成的タイプロジー」をかたちづけているといえる(図4)。たとえば①から④までは「ひとつの外形ヴォリュームに全部門をまとめるタイプ」であり、なかでも①および②aは、外形が対称形をなすなど、「全体性を強調」している。また⑤、⑦cおよび⑧aは、「各部門に対応した外形ヴォリュームの配列によるタイプ」であり、分棟建物が広場を囲むような構成が特徴的である。さらに⑥b、⑦bおよび⑨は、動線や議会などの「特定の用途のみが分節されるタイプ」で、その用途を含む外形ヴォリュームが他の部分を統合する特徴をもつ。さらには外形ヴォリュームに部門との対応がみられない⑥a、⑦bのようなタイプもみられた。このように、本論文を通して明らかになったことのひとつは、それぞれの条件と外形との関係は、いくつかの構成的なタイプとして位置づけられるという点である。これらのタイプが、単に用途あるいは外形といった一面的な視点によるものではなく、両者の関係性のうちに見出されたものであることは、外形ヴォリュームが分節されることによって、その内部の用途をまとめ、全体性へと関係づけるという、建築の実体をもつ、いわば能動的な性質を裏付けるものといえる。

■類型の相互比較による関係の構造化

表2のマトリクスが意味するのは、本論文で市庁舎建築のあり得る構成の可能性として示したタイプロジー全体の枠組みである。それはいわば、化学の元素周期表が、各元素の性格を縦横の軸で構造化していることに似ている。つまり表2の枠組みによって、そこで類型化された各タイプの関係が構造化されているのである。さて、資料の分布がいくつかのマス目に偏っていたことは上でも述べたが、その偏りは構造化された関係のなかで、どのような意味をもつのだろうか。ひとつには、各外形ヴォリュームが、それに「整合」するように様々な用途を分離あるいは組み合わせるなどにより、まとまりをつくり出すということである。事実、資料の分布が少ないマス目をみると、用途と外形ヴォリュームとが対応しない構成が多い。これは一見当たり前のことのようにだが、長い建築の歴史のなかで考えるならば、内容と外形とをどうにか対応させようとする、ある種の合理的な考え方の傾向を直截に示しているものといえる。もう一点は、そのような整合性に沿って、外形ヴォリュームが用途に対応して分節されるタイプ(⑦c、⑧a)ほど、空間的にも外部空間や内部の大空間などを積極的に取り入れた構成をもつ傾向がみられたことである。これと上述した外形ヴォリュームのもつ「能動的な性質」とを考え合わせると、ややうがった見方かもしれないが、そのような空間構成を実現するうえで、用途別に外形ヴォリュームを分節する方法が利用されたとも言い得るのではないだろうか。



凡例 (実線)・・・外形構成の性格 (破線)・・・内外の空間の組合せ・外形ヴォリュームに包含された大空間/外部空間・・・全:全体 / 全(付加):付加的なヴォリュームの全体 / 部:部分

図4 市庁舎建築の外形構成と内外の空間および部門の分節の関係

4-3. まとめ

以上は使用用途についての検討であったが、筆者が本論文で取り扱った、内部の室、構造的に建物を支持する架構体、外装にみられる表現、そして立地環境などといった、様々な条件についても、それぞれに特徴的な構成的タイポロジーが成立し、それらを構造化する枠組みを示すことができた。一般的な見方からすれば、これだけ多種多様な建築の外形が存在し、どのようなかたちでも自由につくることができそうな現代建築であるが、条件ごとに整理すると、そこにははっきりとした傾向がみられるのである。

その多くの事例においては、計画者や設計者が意識する、しないに関わらず、建築の外形を、内外の諸条件との関係において、何らかの整合性をもたせる傾向がみられた。こうした各条件と関連づけられることによって、建築の外形には、様式による規範性や、内外の連続による空間の均質性、素材とマッサによる物質的なモニュメンタリティ、さらには内部の用途を指し示すような表象性、周辺環境との関係を重んじるコンテクスチュアリズムなどといった、社会的、文化的、造形的、環境的な多様な水準における意味や文脈を媒介し正当化する性質が与えられる。さらには、それらが定式化されることによって、いわゆるビルディング・タイプやデザイン・モードなどの形式的なあり方がかたちづくられてきたと考えることができる。

外形に見出せる多様な構成は、それぞれ諸条件と特有の関わり方を示しながら成立している。これは、より敷衍して考えるならば、建築の実体や空間構成が、人々の行動や、用途、構造上の制約などを受動的に示す単なる結果ではなく、より能動的に、諸条件を編成し、あるいは解釈したうえで、現実の空間として出現させる媒体ともいべき役割を担っていることを意味する。本論文は、たいへん限定された問題についての検討ではあるが、建築実体と計画的な問題との関係に対する、新たな視点を導入するきっかけとなるものと考えられる。

5. おわりに：空間構成計画学の実践へ

前章は建築の外形に関するものであったが、構成的タイポロジーとそれを構造化する枠組みに基づく空間構成計画学は、建築にかぎらず、都市空間やランドスケープなど、あらゆる実体的な環境において展開できる可能性をもっている。

また、それは分析的な研究であると同時に、実践的な計画、設計へ向けた認識の基礎を提供するものである。

冒頭で述べた、これからの社会においてより重要になると思われる「何を計画すべきか」という問いにおいては、個別のケースにおいて、建築や都市空間が取り扱うことのできる問題自体を見つけなければならない。ここでは、多種多様な構成を相対的に取り扱うことのできる、本研究が提示するような枠組みが不可欠である。同時に、具体的な実践活動において、その認識の有効性を示すことが、研究を進めるうえでも重要と考える。

そのような認識のもと、筆者は研究活動と同時に、機会に応じてプロジェクトおよび実際に建てられる建物のための設計活動を続けてきている。それは都市に開放された大学キャンパス・モデルの提案⁽⁷⁾や、過密する都市での新たな老人ホーム⁽⁸⁾や小規模集合住宅⁽⁹⁾のモデルの提案、都市公園をより活性化させる仮設劇場⁽¹⁰⁾の提案などであり、それぞれにおいて、これまでにみられなかった構成的タイポロジーの可能性を試みてきている。

急激に多様化する現代建築の表現について、社会的、文化的、造形的などの様々な水準における意味や文脈を定義することは、多分に各個人や時代的な解釈に基づかざるを得ず、それらの真偽を直接的に実証することはできない。しかし一般論としてはそうであっても、実際の建物を計画・設計するうえで計画者や設計者たちは、建築や都市をつくるかぎりは、その根拠を自らのうちに合理化しているはずであり、それは個々の建物や都市空間の表現に刻みこまれているはずである。現代建築や都市の総体は、そのような個々の計画の総体以上のものではない。本研究の検討と知見を通して、現代の計画者や設計者が、意識的か無意識的に関わらず、否応なく投げ込まれている計画や設計の枠組みを認識することができれば、間接的であれ、多岐にわたる現代建築および都市空間の意味や文脈について、具体的な計画や設計を通して問い直す可能性を与えるきっかけとなるものと、筆者は確信している。

参考文献

- (1) 中井邦夫, “現代建築における外形ヴォリュームの分節条件に関する研究”, 博士論文(東京工業大学), 2007年4月
- (2) 中井邦夫, 根本理恵, 坂本一成, “街路に面した商業建築の外形表現-外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究(5)”, 日本建築学会計画系論文集, 第622号, pp. 65-70, 2007年12月
- (3) 中井邦夫, 森山ちはる, 坂本一成, “現代日本の博物館建築における立地環境と外形構成-外形ヴォリューム

の分節による建築の構成形式に関する研究(4)”, 日本建築学会計画系論文集, 第 607 号, pp. 33-40, 2006 年 9 月

(4) 中井邦夫, 妹尾慎吾, 坂本一成, “現代建築作品における架構と空間構成- 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究 (3)”, 日本建築学会計画系論文集, 第 551 号, pp. 149-155, 2002 年 1 月

(5) 中井邦夫, 大内靖志, 小川次郎, 坂本一成, “現代日本の建築作品における室の集合と外形構成- 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究 (2)”, 日本建築学会計画系論文集, 第 528 号, pp. 125-131, 2000 年 2 月

(6) 中井邦夫, 坂本一成, “現代日本の市庁舎建築における空間構成と用途の分節- 外形ヴォリュームの分節による建築の構成形式に関する研究”, 日本建築学会計画系論文集, 第 519 号, pp. 147-153, 1999 年 5 月

(7) 坂本一成 (代表), 藍澤宏, 篠野志郎, 翠川三郎, 宮本文人, 奥山信一, 塚本由晴, 斎尾直子, 足立真, 中井邦夫 (以上分担), “都市共生型- 高機能大学キャンパスの再構築計画に関する研究”, 平成 13 年度~15 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2) 13450243) 研究成果報告書, 2004 年 3 月

(8) 中井邦夫, 小倉亮子, “有料老人ホーム・グリーンヒル”, 日経アーキテクチュア, 日経 BP 社, 2007 年 11 月 26 日号

(9) 坂本一成, 遠藤康一, 岡村航太, 中井邦夫, “egota house A”, 新建築 79 卷 7 号, 新建築社, pp. 58-69 ほか, 2004 年 6 月, 2008 年日本建築学会作品選奨, 2008 年 3 月

(10) 小倉亮子, 中井邦夫, “ベセトシアター”, 新建築 80 卷 3 号, 新建築社, pp. 224-225, 2005 年度グッドデザイン賞, 日本産業デザイン振興会, 2005 年 12 月